顔

滝龍太郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
顔

【Nコード】
N0344J

【作者名】
滝龍太郎

【あらすじ】
コンビ二強盗の犯人の顔写真が新聞に公開された。
それを見た園辺幸雄は自分そっくりなのでびっくりしてしまった。
前日、新宿で異臭騒ぎがあり、たまたまそこにいた幸雄はビデオに撮られており、テレビでコンビ二強盗犯に似ていると言われ、大
写しにされてしまった。
それを知った真犯人は、再び犯行を犯すが……。

(なんだ、これは！)

園辺幸雄は新聞を見てびっくりした。

いつものように、朝刊のスポーツ欄を一通り見て、三面記事に目を移した。

そこには、二日前に横浜市中区のコンビニを襲った犯人の顔写真が載っていた。防犯カメラからの写真なので、斜め上から、しかもさほど鮮明ではないけど、それは明らかに自分の顔そっくりだったので幸雄はびっくりしたのである。

(二日前のコンビニ強盗か)

幸雄は、声を出さずに口の中でぶつぶつと、新聞の記事を一字一字噛み締めるように読んだ。

台所では、女房がトントンと幸雄の好物のナスの漬物を切っている。ソファでは五歳になる息子がテレビのアニメを見ている。日曜日のいつもの光景である。

食事を終えると、幸雄は息子を連れて近所の公園へ散歩に出掛ける。その後、一段落した女房が公園に顔を出す。午前中は公園でワイワイやりながら過ごすのである。

なんと微笑ましい家庭ではないかと、幸雄は常々そう思っている。ところが、今日からはそうはいかない。自分と瓜二つの男が横浜でコンビニ強盗をやったのである。最近やたらとこの手の強盗が多いので気にはしていたが、まさか自分の身の上に降りかかって来るとは思わなかった。降りかかるとは大袈裟だが、あまりに似ているので何らかの警察の動きがあるのではないか。ただ、自分は何もやっていないのだから、別に心配することはないのだが。

『横浜市中区に土地カンのある男ではないか』

そうれみる。俺には横浜市中区なんて行ったこともないし、知り合
いもない。似ているからといわれても、二日前の午前四時頃にそ
んな所に俺がいるわけがない。

そうだ、アリバイだ。二日前というと金曜日だ。その日の朝四時。
俺はいつもどおり夜十一時頃に寝て、六時に起きるまでどこにも行
かずこの家で眠っている。

そうだよ、何を考えているんだ。俺は何もやっていないし、知ら
ないことだ。そんなアリバイを考えてもしょうがないな。

「さっ、ごはんよ」

女房の声で、幸雄は新聞をずらした。

いつの間にかテーブルの上は朝食の用意ができており、幸雄の好
きなナスの漬物が目の前に置かれていた。

幸雄は新聞をたたみ、何事もなかったように好物の漬物を口にし
た。最近太りすぎみなのでご飯を一杯にしているのだが、漬物があり
日曜日はゆっくりできるのでつい二杯食べてしまう。

毎日の通勤でそうは太れるわけがないのだが、体質のせいか食べ
た物が全部栄養になる感じである。

自宅は東武東上線で高坂という駅からバスに揺られ、鳩山ニュー
タウンという大手の大規模な分譲地に住んでいる。その高坂駅から
終点の池袋駅に行き、山手線で新宿駅まで通っている。毎日の電車
はずし詰め状態で太れる余裕などないのだが、やはり体質のせいか
と幸雄は納得している。

あの写真の男も小太りな体つきだな。強盗をやるならもうちよっ
と身軽じゃないとな。逃げ足が遅くちゃみっともないし、捕まっち
まう。

まっ、そんなことはどうでもいいや。それより今日は公園に行く
のはやめて家でゴロゴロしていよう。だれかがこの新聞を見ていて
園辺さんのご主人に似ているなどと言われ、その都度、この顎のと
ころがちよっと違いますとか、あの日は家にいたなどと言いつる

のも面倒臭いし、やっぱり家にいよう。

「さあ、パパと行ってらっしゃい」

女房が食事を終えた息子に言っている。

「いや、今日はやめておこう。頭痛がするのでのんびりさせてくれ」

幸雄は咄嗟に嘘を付いた。そして、だるそうにソファに座った。

女房はしかたがないといった表情で息子をなだめ、食事の後片付けを始めた。

幸雄はぼんやりとテレビを見ているのだが、頭の中はあの犯人のことでいっぱいである。

しばらくして、女房は息子を連れて公園に出掛けた。

あら、今日のご主人と一緒にじゃないの。なんて近所の主婦が女房に話しかけ、そういえば今朝の新聞に出ていたコンビニ犯人、お宅のご主人に似てたわね、なんて噂しないだろうな。幸雄の妄想は勝手に逞しく育って行った。

(あつ、これだ)

テレビの映像に犯人の顔が写し出された。

まったく俺に似ているが、目のところがちよつと違うかな。もう

少し俺の方が垂れてるな。

「実は、この犯人に似た人物が、昨日新宿で異臭騒ぎのあった時に見かけています」

(なに！)

昨日新宿で起こった異臭騒ぎのビデオの中に俺の顔が写っている。アナウンサーがビデオを静止し、指で俺の顔を指している。

「この人物です。この顔とコンビニ犯人の顔を見比べて下さい」

テレビの中に二つの顔が大写しにされた。

なんで俺の顔をそんなに大写しにするんだ。

幸雄は怒った。冗談じゃない。丸つきり俺が犯人じゃないか。

テレビでは、犯人の特徴を説明している。そして、テロップでこの顔に見覚えのある方は、警察かテレビ局に連絡して下さいと電話番号が流れた。

その時、居間の電話が鳴った。

同僚からだった。テレビを見ていたら突然お前の顔が写し出されたので連絡したのだと言う。

「ああ、そうなんだよ。俺の方が驚いているんだ」

「心当たりは？」

友人は、心配するよりも何かの間違いじゃないかという配慮の聞き方だった。

「あるわけないじゃないか。ただ、犯人の顔が俺に似ていることは確かなんだ。新宿？ 新宿は昨日の昼頃たまたま近くにいたのでやじ馬根性を出したわけだが、まさか俺の顔があそこに写っていたとは気がつかなかったな」

「そんなに悠長に構えていてもいいのか？ 他のだけれが、今頃はお前のことを警察に通報しているかも知れないぞ」

「そんなことを言っても俺は何もしてないし、何も知らない。アリバイだってあるから、別に心配してないけど」

幸雄は、今の正直な気持を喋った。

「それなら騒ぎが大きくなる前に自分の方から連絡した方がいいぞ」「どうして？」

「考えてみな。お前の家に報道人がわんさかと詰め寄るんだぞ。女房子供が可哀想だろう。近所の手前もあるだろうに」

「そうか」

友人にそう言われて、幸雄は納得した。

考えてみれば迷惑な話だ。たまたま顔が似ているというだけで、偶然写ってしまったやじ馬の中の顔をアップにして、あーだ、こーだと言っているのである。

友人の電話を切ると、またすぐに違う友人から同じような電話が入った。

「分かってる、分かってる。俺じゃないんだから。すぐにテレビ局に連絡するよ」

俺よりも、回りの方がどうにも収まらなくなっているみたいだ。

「俺に似たやつがいる？」

「そう。さっきテレビでやってたわ」

前野晃子は、同棲相手の足立和則に、コンビニ犯人に似た人物が新宿の異臭騒ぎの中にいたことを話した。

「そいつはおもしれーな」

晃子が不満そうな顔で和則を見た。

「何がおもしれーよ。こんなぼつちで」

晃子が新聞をバサツと投げた。六帖一間の狭い部屋に埃がフワツと浮いた。

「何をカリカリしてるんだよ。俺だってもう少しはあると思ったんだ」

「まったくドジなんだから。それにビデオに撮られて」

晃子は、投げ出した新聞の写真をしげしげと見つめた。

「それだよ。それを逆手に取るんだよ」

「何を？」

「奴を犯人にするのさ。せつかく俺に似た奴がいるんだから。テレビだって言ってたんだろ？俺に似た奴が新宿にいたって」

「そうだけど」

晃子が不審な顔で和則を見た。

「そんな顔で見るなよ。俺の考えできつとつまく行く。いいか、今頃はテレビ局の方でもそいつを探してると思う。遅かれ早かれ見つかるだろう」

「どうして分かるの？」

「それは、そいつが犯人じゃないからさ。自分がテレビに写り犯人ではないかと疑いをかけられれば、黙っちゃいないだろう。奴か奴の親や友達なんかがだれかは見てるだろう。そうなりゃお前かということで連絡が来て、人違いだということが分かればすぐにテレビ

局が警察に連絡するだろう」

和則は、その人物が起こすであろう行動を考えた。

「そうね。私でもそうするわ」

「そこで警察はそいつのアリバイやら土地カンがあるかどうかを調べ、シロであることを決定づけるだろう。二、三日中に……」

「二、三日中に……。だからどうだって言うの」

晃子は、和則の回りくどい言い方に苛ついている。

「その時だよ。その時が勝負だ。警察はその男のことですっぱいになる。それを狙ってもう一度、あの界隈をやる」

呆れ顔の晃子に、自信たっぷりの言葉で和則がそう言つと、

「何でもいいから、もうちょっとでっかく稼いでくれなくちゃ割に合わないよ。あたしだって客になりすまして何度も下見に行ってるんだからね。あいつも怪しいなんて探られたらぶっ飛ばしもんだからね……。」

晃子が、新聞を和則に投げた。

「大丈夫。コンビニの方だって、また同じ界隈をやられるとは思わないだろう」

和則は得意そうに言い、もう一度新聞をしげしげと見つめた。

「ばつちり写ってるなあ」

「なあじゃないわよ。まったくドジなんだから。カメラは上からなんだから帽子を被ってって言うてるのに、まったく……」

「しょうがないよ。あの時は風が強くて飛んじやっただから」

「だったら拾ってからやればいいでしょ！」

晃子がテレビのチャンネルをカチカチと回した。どこの局でもニュースはやっていなかった。

「飛んでっちゃったんだから……」

和則は小さな声で、まだその事を言っている。

「だったらやめればいいのよ！」

晃子のきつい声が、狭い部屋に響いた。

和則は何も返答ができなかった。自分がドジったばかりに顔を写

されてしまい、今後の仕事がやりずらくなってしまうたのである。
二人の住まいは、練馬区の外れ大泉学園という閑静な住宅街の一角にある、ワンルームマンションである。この場所から横浜での犯行は、警察を欺くために遠出をしているのである。

犯行にはいつもオートバイを使い、できる限り自分の住まいから離れたところを襲っていた。和則一人の時もあれば、晃子にオートバイを跨がせ、スタンバイさせる時もある。

3

「かずか？」

聞き慣れたパチンコ仲間から、和則の携帯電話に連絡が来た。

「ああ」

と、和則が言ったと同時に、晃子が携帯電話を取り上げた。

「お前がやったのか？」

晃子にも聞き覚えのある声だった。

「お前の顔そっくりだけど、まさか違うよな」

薄笑いを浮かべたその顔が、晃子の脳裏をかすめた。

「なにを？」

晃子がいきなり言ったもんだから、相手は一瞬黙ってしまった。

「なんだ、彼女か。そういきり立つなよ。かずがやばい事したのでイライラしてるのか？」

「なにを？ かずは何もやってないわ。勝手にいい加減なことを言わないでちょうだい！」

小さな携帯電話のマイクに向かって、晃子は声を張り上げた。

「でも、かずによく似てるぞ。皆もそうじゃないかと噂してるしな」

「やめてよ。そんな噂しないでちょうだい。迷惑だわ」

「おい、俺のこと犯人と思ってるのか」

和則が晃子から携帯電話を取り上げた。

「かずか、お前にそっくりなんだな」

「そうなんだよ、迷惑してるんだ。外にも行けないよ」
和則が訴えた。

「だったら警察に言えばいいじゃないか。俺に似た奴が新聞に載っ
ていて迷惑してるんだけど、どうしたらいいのかって」

「そんなことできるかよ」

「どうして？」

「どうしてって、根掘り葉掘り俺のことを調べるに決まってる。世
間様に大手を振れる身分じゃないからな」

和則が苦しい言い訳を言った。

「まあな」

仲間も同じようなもので、変な納得をした。

「とにかく、俺じゃないことは確かだから、皆に言っておいてくれ」
和則が迷惑そうに言った。

「パチンコにも行けなくなっただじゃない」

電話を切った後、晃子がふて腐れて言った。

「ああ、しばらくは籠の鳥だ。でも夜は商売に行くからな。また横
浜の中区だ」

「もう何も言わないわ。そのかわりドジを踏まないでよ」

晃子の言葉に、和則はああ、とだけ応えた。

その夜、といっても明け方近くになるが、和則は横浜市中区の、
前の場所とさほど離れていないコンビニを襲った。

防犯カメラを意識して、額から目にかけてわざと写るように帽子
を浅めに被つての犯行であった。

4

園辺幸雄に対する警察の対応は厳しかった。それは、あまりに
も顔が似ていたせいである。それに年格好も体つきも似ていたから
である。

幸雄は、それなりの覚悟を決めて警察に来たのだが、思った以上

に時間を取られ犯人と同じような扱いをされた。

警察に出頭して六時間近く経って、ようやく幸雄は自由の身になった。警察は信じてくれたのか、それとも疑惑を持ったまま泳がされるのか、幸雄には分からなかった。

報道関係には一切伏せると約束してくれたので、その点は助かってはいた。しかし、親戚、友人、知人らが心配のあまり、幸雄の自宅に大挙押しかけていた。

一通りの説明をして皆引き取ってもらったが、その夜、正確には次の日の明け方、また横浜市中区のコンビニが襲われた。写し出されたビデオテープから、幸雄は刑事の訪問を受けた。

「刑事さん、自ら出頭した者がその晩に犯罪を犯しますか？」

警察署に同行してほしいと言われ、幸雄はパトカーの中で二人の刑事に食らい着いた。

「昨日の七時まで警察にいたのですよ。一時から夜の七時までですよ。もうへとへとになり、帰ってからもまた大変で、親戚なんかが大勢来ていて結局寝たのは午前一時過ぎです。それを四時に横浜までどうやって行くんですか？」

幸雄の訴えを、二人の刑事は耳を貸そうとしない。あくまでも、言いたいことがあつたら署で聞くからと、取り合ってくれない。

幸雄の脳裏に報道人に囲まれた自分の姿が映った。このまま警察で足止めをくらって会社にも行けず、朝のニュースで報道されて、やっぱり犯人はあいつだったのかと回りから非難されるのを、恐れた。

「刑事さん、とにかく俺は何もやっていない。俺のアリバイを調べてくれれば分かるはずだ。このままでは家族が可哀想だ。刑事さん、何とかしてくれ！」

幸雄の訴えはただのあがきとしか取ってもらえず、二人の刑事は同じ言葉を繰り返すばかりであった。

やがてパトカーが警察署に着いた。報道人がいないのを見て、幸雄はほっと胸を撫で下ろした。

「この顔を見てみる」

取調室で、警部と呼ばれる男にビデオの映像を見せられた。

「確かに俺に似ているけど、俺はやっていない。さっきの刑事さんにも言ったのだが、昨日はあれから家に帰りどこにも出掛けてないんです。ずーっと家にいたんです」

幸雄はパトカーの中で言ったことを何回も繰り返した。そんな幸雄の顔を、警部がギロリと睨んだ。

「そんなこと言ってもこのビデオに写ってるのはお前だろうが・・・。昨日、わざわざ出頭して来たのは我々を欺くためじゃないのか」
警部の強い口調に、幸雄は圧倒された。

（警察というやつは人の裏を考えるんだな。これじゃ何を言っても信用されないな）

幸雄は口を開くのがおっくうになってきた。しかし、このままでは自分が犯人にされてしまう。わざわざ出頭して来たのに犯人扱いされてはたまらない。

「たとえば、俺がやったとした場合、なんであの時間にあの場所へ行けるんですか？」

幸雄は疑惑を振り払おうと、方向を変えて言った。

「高速を使えば鳩山から横浜まで、夜中だったら二時間もあれば十分だろう」

「でも、バイクって聞いていますが」

「バイクでも二時間あれば行く」

警部の眼光が鋭く幸雄に刺さった。

「でも俺はバイクなんか乗ったことがない。免許だって持っていないし」

幸雄のその言葉に、警部の隣りに立っていた若い刑事が怒鳴った。「免許なんかなくて乗ることはできるだろ！」

「じゃそのバイクはどこにあるんです？」

刑事の言葉に、幸雄もつい強い口調で言ってしまった。

「そんなのどこかに隠してるんだろ。この鳩山じゃいくらでも隠すことができるからな」

「だったら探して下さい。そんなのありっこない」

幸雄はそう言って頭を抱えた。

「横浜の中区だってそうです。そんなところへ行ったこともないのに……」

幸雄は頭を抱え下を向いたまま喋った。

「そんなことを言っても、我々は今の時点では可能性があるかないかを判断するしかないんだ。バイクをどこかに隠しているかもしれない。それとも近くまで行って放置してあるバイクを盗んだのかもしれない。そしてどこかに捨てた。このように我々はあらゆる角度から追及していかなければならない」

警部が喋っている間も、幸雄は頭を抱えて下を向いていた。

「園辺さんは午前一時ごろに寝たと言いましたね。そうすると、午前三時の犯行時には自宅で寝ていたかも知れませんが、横浜の中区で強盗を働いていたかも知れないのです」

幸雄は黙って聞いていた。ここでそんなことはないと言っても結果は同じだろうと考えたからである。

「物理的に不可能でない場合は、我々は疑惑を持ちます。そして、アリバイとて家族だけでしょうから、それは薄くなります。何としてもあのビデオに写っている顔があなたそのものだからです」

幸雄は頭を上げ、警部を睨みつけた。

「いや、あなたに似ていたからです」

警部が言い直した。

「犯人に似ている人物に、我々は黙ってあなたの主張を聞くわけにはいかないでしょう。そのことは分かっています」

警部は穏やかに喋ったが、眼光は鋭く幸雄を捉えていた。

「じゃ、どうしたらいいのですか？」

幸雄は開き直った言い方をした。別に開き直ってはいないのだが、適当な言葉がみつからなかった。

警部は、幸雄のアリバイの裏付けを取るのしばらくの間警察にいてくれとお願いした。あくまでも警部の言い方は、幸雄を犯人としてではなく、犯人ではないという裏付けを取るためだと主張している。

6

「やったわね」

見事に警察の裏をかいて、横浜市中区のコンビニを襲って成功した足立和則は、晃子の前で得意になっていた。

「どうだい、俺って頭がいいだろう」

せしめた金は二十数万円。今までに一番の金額だった。

「まあね、ちよっとは見直したわ。ところで、かずに似た人はどうしたんだろう？」

「テレビで何もやってないのか？」

テレビ局で似た人がいると報道したつきり、その後何もないのが気になった。それに、今回わざと顔を少し見せたのに、その報道もない。

和則は、そのことについて不安を持っていた。

「きつとあの人を追っているのよ。極秘で。そして今度の事件でしょ、なおさら極秘であの人を追っているんだと思うわ」

晃子は別に心配するようでもなく、呑気に構えている。和則の言う、やつを犯人に仕立てるんだという言葉に、晃子は酔いしれていた。

「ねえ、どこか涼しい所にも行きたいわ」

珍しく、晃子が甘えて来た。

久しぶりの大金をみて、窮屈な生活を毎日強いられ苛立っていた晃子は、胸のつかえを一気に吐き出したと思った。

ワンルームマンションの狭い空間から、思いつきり背伸びできる空間へ夢を馳せた。

白樺の間から涼しい風がそよそよと頬を伝い、緑の絨毯を敷き詰めた先には遠く薄霧の中に高山が霞んで見える。

そんな光景を、晃子は頭の中で描いた。

「よし、行こう」

和則の二百五十CCのバイクに二人乗りし、大泉インターから関越自動車道に入り、北上した。

コンビニの犯人の顔にフルフェイスのヘルメットを着け、ただの若いカップルに見せかけた。

藤岡ジャンクションから上信越自動車道に入り、碓氷軽井沢インターまで、さほど飛ばさなかったが一時半ほどで着いてしまった。インターを出て、長野新幹線の線路を潜り、軽井沢駅を左折し旧軽の銀座通りまで行った。そして、二人はそこでバイクを下りた。

和則は帽子にサングラス。帽子は犯行の時に使ったものとは違って、ハイキングなどに被るチューリップハットを被った。

軽井沢銀座は、朝というのに人でごった返していた。

そんな雑踏の中に二人は紛れ込んだ。ごく普通の恋人同士のように手を繋ぎ、店先に並べられた服などを手に取り楽しんでいる。

何の不安もなく、何のわだかまりもなく、無邪気に普通に振る舞っている。どこのだれが見ても犯罪を犯している人物には見えない。今の世の中、暗く裏道を歩く人間だけが犯罪を犯すのではなく、ごく普通に振る舞っている人間でも犯罪を犯す。その普通の人間ほど、その裏に秘めたものは計ることができない。

隣のお兄さん、お姉さん、おじさん、おばさん、その中に犯罪者がいるかも知れない。それを簡単に分かせないところが現代なのである。そんな現代を知ってか知らずか、和則と晃子は青春を隠れみのにして犯罪を楽しんでいる。

「こんなのいいんじゃない？」

最近太り出してしまった和則に、晃子がLサイズの単パンを和則

の腰に当てた。ここはLサイズ専門店で、客層を見てみると男の方がLサイズで、女の方は普通サイズというのが多い。和則と晃子もそのパターンである。現代の若者のパターンはそれが非常に多い。その定説で、園辺幸雄の友人にもそのパターンが多いのであった。八月も終わりに近い時期、上信越自動車道の開通で軽井沢がぐつと近くなったのか、大勢の人が来ているということは夏休みをずらして来ているのだろう。

幸雄の会社はサービス業のため交替で休みを取ることになっていて、お盆を挟んだ一週間が幸雄の休みで、その後何人かが交替で休んでいた。

そんな中、幸雄と同じ会社の上田夫婦がここ軽井沢に遊びに来ていた。今年は天気が悪く、どこに行くといっても四歳の子供を連れて遠出はできず、近場の軽井沢ならということをやって来たのである。

上田も平均的若者であり、そのLサイズの専門店で単パンなどを物色していた。

中々気に入ったものがなく、ふと視線を斜め前の人物に移した。(園辺がいる。やつの休みは終わったはずなのに)

上田が和則に近づいた。
はっ、と上田の足が止まった。親しそうにしている女性が目に入っただけである。

(だれだ？ 園辺の奥さんと違うな)

園辺の奥さんとは、以前二度ほどお邪魔したことがあるので面識がある。大手のニュータウンを買ったからと、呼ばれて行ったのである。二度目は、自分も将来こういうのを購入したいということで、女房子供を連れて行ったことがある。夫婦仲が良く、二人とも子煩悩でいい家庭を作っているというのが女房の印象であった。

上田は不審な顔をしてその二人を見守った。

二人は恋人のように仲が良く、品物を手に取ってはじゃれ合っている。

(やけに仲がいいな。まるで恋人同士だ)

上田はその光景を見て、声を掛けるどころか、二人が上田の方に来たのに後ずさりしてしまった。

何かあった？ と女房が上田のそばに来た。上田は、あれ、と女房にあごで園辺を指した。

「あら、園辺さん」

と言ったとき、横の女性に気づいた女房は口をつぐんでしまった。

「あの人だれ？」

不安な顔で上田に尋ねた。

「さあ、俺にも分からないんだ。あの二人を見ていると、まるで恋人同士なんだよ」

女房が険しい顔をした。

「浮気？」

「まさかと思うけど……」

上田はその後の言葉が続かなかった。

「そんな……。あんないい家庭があるのに。そんなこと……許せないわ」

女房は険しい顔をさらに険しくして、二人に近づこうとした。

「おい、よせよ」

上田は女房を止めた。ここで騒ぎを起こしても何の解決にもならない。

「でもおかしいんだよな」

園辺の休みはもう終わって会社に出ているはずだと、女房に話した。

「そういうことにして、浮気してるんじゃないの？」

女房が鋭く迫って来た。このままでは気の済まない性格を知っている上田は、会社に電話を入れてみた。案の定、入社していない。しかも、女房からの連絡で、はっきりした理由を言わなかったらしい。

「やっぱりね」

上田は人違いと心に念じていたが、女房の推測通りなので気がいっぺんに抜けてしまった。

7

園辺らしいその二人連れは、その店を出て何軒か先の違う店に入って行った。

上田の女房は人ごとと言えども気がおさまらなく、今度は園辺の家に電話しろとしつこく上田に迫った。

「何て言うんだよ」

友人の女房に、おたくのご主人が他の女と仲良く旅行していると
は言えない。

「ありのままを言えばいいのよ。何も隠したってしょうがないでしょ」

見本であるような夫が、こんなことをしていることに腹の虫がおさまらないでいるらしい。

ポロポロン、と一鳴っただけで園辺家の受話器と繋いだ。

「上田です。ご無沙汰しております」

「あら、上田さん」

上田の声に、園辺の奥さんは驚いたように声が上ずった。

「園辺さんはいますか？」

いるはずがないのだけど、上田は恐る恐る聞いてみた。

「ええ、いや・・・、ちょっと出掛けています」

上田は、明らかに奥さんの声に変化があるのを見逃さなかった。

「奥さん、正直におっしゃって下さい。園辺さんはだれかと出掛け
ているんでしょう？」

上田が聞いた。

「え、ええ。ちょっと用がありました」

「用ですか？」

言わずらそうにしている奥さんに、これ以上奥さんを悩ませては

いけないと思い、上田は正直に話そうと思った。

「実は、今同じ所にいるのです」

「えっ！」

奥さんが驚いた。

「今、何と？」

「私は今が休暇でして、家族で軽井沢に来ているのです。そこで偶然園辺さんに会ったのです」

「えっ？ そんなことはないわ」

奥さんの声の調子が変わった。

「奥さんには内緒で来たと思うのですが、確かに今ここにいます」

奥さんがしばらく沈黙した。そして、

「その人だわ！ その人に違いないわ。その人を捕まえて。お願い！」

奥さんが大声を出して哀願してきた。

「その女性を捕まえるのですね」

上田は、園辺の浮気相手を捕まえるのだと思っている。

「女性？ そんな人はどうでもいいのよ。その園辺に似た人を捕まえるのよ。その人のために主人は警察に捕まってるの。お願い、捕まえて！」

上田は何のことかよく分からなかった。夏休み中で、朝のテレビもそこそこに新聞もさほど目を通さず、子供を連れて近所の公園やプールに出掛けていたので、コンビニ強盗のことは知らなかった。「とにかくその人から目を離さないでいてね。すぐにこちらの警察からそちらに連絡させるから。あと五分したらまた電話して下さい、お願いします」

園辺の奥さんの依頼を聞き、何やらよく分からないが、上田はその園辺に似た人物の後を追った。

和則と晃子は、何軒かの衣料店やら土産物屋を覗いた後、ソフトクリームをなめながら銀座通りを出て行った。そして、そこに止め

てあつた練馬ナンバーの中型オートバイに跨がり、軽井沢駅の方
走って行った。

上田はそれを見届け、五分経つと園辺の奥さんに電話を入れた。
奥さんは、さっきとは打って変わっていつもの奥さんらしく落ち
着いた声で、今の状況を軽井沢署に連絡して下さい、と電話番号を
伝えて来た。

8

和則と晃子は、軽井沢の駅前をぐるっと一回りして中軽井沢方
面に行き、鬼押し出しへ向かった。

二人は初めて来る所で、いつか一緒に行つてみたいと言つていた
所である。

奇岩だらけの道を、二人は手を繋ぎ、これからの道のりなど何も
考えず、ただ単に見たこともない岩に軽い感動をしていた。

自分たちの今生きていることしか考えず、悪い事と良い事の判断
基準が曖昧で、このくらいまでなら大丈夫だろうという安易な気持
で日々を生きて来た。その陰に隠れた罪なき人の迷惑など考えず、
ただ欲望のために犯行を繰り返す。

現代の人間であろうと、昔の人間であろうと、判断基準の甘さは
自己の甘さによって生まれるのである。

和則の練馬ナンバーの中型バイクは簡単に発見された。鬼押し出
しの鐘突き堂の所で二人がいるのを、捜査員が何げない足取りで回
りを固めた。

和則が鐘を突こうとした時、何げなく晃子の方を見ると、後ろの
方と右側、そして左側にもそれらしい人物が二人を狭めていた。

「晃子！ 逃げろ！」

和則が大声を出したが、すぐに晃子の両手は捜査員に掴まれてし
まった。同時に、和則のいる鐘突き堂の上にも捜査員が上がり、和
則の体はねじ伏せられてしまった。

「なによ！」

晃子が抵抗した。

「私が何をしたっていうの！」

捜査員は晃子の手を離し、

「コンビニ強盗の共犯として、署に同行する」

と、野太い声で晃子を威圧した。

「やよ！ 私には関係ないわ。やったのはあの人だけよ」

晃子が、険しい顔をして和則に指を差した。

自分は何もやっていないのだと、捜査員に対して必死に抵抗する

醜い姿を、晃子は軽井沢の清らかな空気に晒した。

そこに、秋を伝える涼しい風が、和則と晃子の体の中を通り過ぎ

て行った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0344j/>

顔

2010年10月8日11時58分発行